

阿岐のまほろば

Vol. 27

弥生人のマンホール??

はらのたにいせき こふん たかやちゅうなかじま
原の谷遺跡・古墳 (高屋町中島)



原の谷遺跡の貯蔵穴群

実は、マンホールではありません。平成13(2001)年度に発掘調査を実施した、原の谷遺跡(高屋町中島)で見つかった竪穴群です。地上からみると円筒のように掘り込まれているため現代のマンホールに似ていますが、米などの穀物を貯えていた地下室のような穴で、「貯蔵穴」とよばれています。弥生時代の穀物倉庫といえば、高床(式)倉庫がよく知られていますが、現在までに調査された例をみると、高屋地域では高床倉庫よりも貯蔵穴が一般的であったようです。

原の谷遺跡では、弥生時代後期～終末期のムラが見つかり、弥生時代の竪穴住居跡4軒のほか、

いわば「地下倉庫」といえるような貯蔵穴15基が、約10m四方のなかに密集して作られ、この付近が、丘陵を単位とするようなムラ(小集落)の貯蔵区域となっていたことがわかりました。

高屋町は、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多く確認されている地域ですが、近年の開発に伴う発掘調査によって、盆地の丘陵や山裾を中心に弥生時代の遺跡が見つかり、この地域に、弥生時代中期(約2100～1900年前)から後期・終末期(約1900～1700年前)にかけて、いくつものムラがつけられていたことがわかっています。

貯蔵穴は県内でも一般的にみられますが、原の谷遺跡では、最大のものが、直径が上端1.1m、下端（底）1.7m、深さが2.4mで、容積は約3.7㎡（何と3700リットル）と大きく、断面形は袋状（理科の実験に使うフラスコのような形）で、上端が狭く、中ほどにくびれがあり、底に向かって広がる形になっています。

ここでは、貯蔵穴について、Q & Aのかたちで紹介します。

Q1 なぜ、袋状の断面形（フラスコのような形）なのですか？



貯蔵穴とその断面形

A1 上端が狭く、中ほどがくびれているため、外気が内部に入ることが少なく、内部は外に比べて気温や湿度の変化が小さいことが考えられます。このため、冬の凍結や夏の腐敗から食料をまもり、より長い期間保存することができたものと思われます。

Q2 お米は残っていないのですか？



貯蔵穴出土の炭化米（浄福寺1号遺跡）

写真提供：

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

A2 原の谷遺跡では出土していませんが、貯蔵穴から炭化した米が見つかった遺跡としては、本遺跡の北東1.5kmにある浄福寺1号遺跡があり、弥生時代後期（約1800～1900年前）の貯蔵穴2基から数百粒以上の炭化米が見つかります。遺跡から米が発見されても不思議でないように思われますが、炭化していない「ナマ」の米は、くさって分解されてしまうため、2000年近く後の現在までは残っていません。したがって、何かの理由で焼け焦げるなど炭化したものだけが、形を残していると考えられます。

**Q3 雨が降ると穴の中に水がたまるのでは？
湿気を防ぐ工夫はみられますか？**

A3 竪穴住居跡内に掘り込まれた貯蔵穴は、住居の屋根があるので雨水は入りにくいと思われます。住居跡外のは開口したままにできないので、覆い屋があったと推定されています。それでも、地下から水がしみ込む場合も考えられます。

原の谷遺跡では、水はけのよい場所が知られていたようで、丘陵上の、花こう岩が風化した地山に掘り込まれ、調査時にも地下水がたまることはほとんどありませんでした。また、壁際に浅い溝を巡らすことで底面を乾燥しやすくする工夫も見られます。また、底面近くの側壁に棒を差し込んだと考えられる穴が巡るものもあり、穀物が水につからないように棒を網のようにわたすなど、工夫されていた可能性が考えられています。

下の写真は、本遺跡の北西約1kmにある西本6号遺跡で見つかった貯蔵穴です。貯蔵穴の底に土器が並ぶことから、穀物を土器に入れて貯えていたのかもしれません。土器に入れることも、湿気を防ぐ方法だったものと思われる。



貯蔵穴の底で見つかった土器（西本6号遺跡）
写真提供：

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

**Q4 貯蔵穴をもつ住居跡は、ほんとうに「イエ」
なのですか？**

A4 深さ数十cm～1m程度の小型の貯蔵穴を1、2基程度もつ住居跡は、かつて農家の床下にあったイモを保存した穴があったように、「床下倉庫」をもつ「イエ」であった可能性が高いと思われます。

原の谷遺跡の場合、住居跡内に径1m前後の貯蔵穴が5基もあり、うち、2基が2m以上の深さであることを考えれば、蓋があったとしても、転落しないか心配で、とても安心して眠れる住まいではなかったように思われます。このことから、この住居跡は、居住のための「イエ」ではなく、屋根という大きな覆い屋をもつ貯蔵用の施設（倉庫）だった可能性が考えられます。

貯蔵物については、貯蔵穴の規模によって違いがあったことも想定されますが、出土例のある米のほかにも、たとえばイモなどが保存されていた可能性も考えられるでしょう。



貯蔵穴のある住居跡

さて、当地域で約200年間作り続けられた貯蔵穴は古墳時代になると作られなくなり、穀物は高床倉庫に保管されるようになります。

このことは、穀物が家族やムラの共同管理（貯蔵穴）を離れ、高床倉庫をもつ一部の有力者の管理へと移ったようすを示しているようにも思われます。（出野上）

原の谷古墳

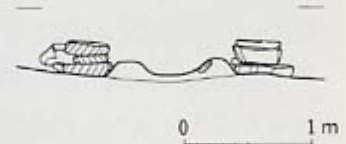
—ムラの跡に造られた前期古墳—



原の谷古墳全景



こわされていた竪穴式石室



石室と粘土床の断面

原の谷遺跡の弥生時代のムラが埋もれてから数十～100年後の古墳時代前期（4世紀前半頃）、ムラの跡地である、盆地を見下ろす丘陵先端近くの小高い平坦地に原の谷古墳が造られました。

この地域の古墳時代の前期（4世紀頃）の古墳には、古墳時代初頭～前期の才が迫第1号古墳のほか、国産といわれる三角縁神獣鏡が出土した白鳥古墳があり、それに後続する中期のものでは仙人塚古墳などが知られています。

原の谷古墳は、墳丘が方形または円形で、大部分が盛土によるもので、長さ（径）が約23m、高さが約3mと、多くの人々を動員した本格的な古墳といえます。埋葬施設は、後世に壊されていましたが、断面U字形の粘土床の存在から割竹形木棺（丸太をくり抜いた木棺）を納め、四方に平たい石を積み上げて囲む竪穴式石室で、畿内的な要素をもつ古墳時代前期の古墳であることがわかりました。また、墳丘盛土の下から、「布留式系」といわれる土師器（古墳時代の素焼きの土器）が出土しました。

これらのことから、この古墳に葬られた人は、畿内を中心とする勢力の影響下にあった地域の有力者ではないかと考えられます。（出野上）



遺跡位置図

（国土地理院発行5万分の1地形図「竹原」）

- 1 原の谷遺跡・古墳 2 西本6号遺跡 3 浄福寺1号遺跡
4 才が迫第1号古墳 5 白鳥古墳 6 仙人塚古墳

（財）東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

阿岐のまほろば Vol. 27

発行日 2002（平成14）年12月27日

編集 財団法人東広島市教育文化振興事業団 文化財センター

発行 東広島市西条町大字馬木541-1

TEL 0824-25-3880 〒739-0033

印刷 電子印刷株式会社

広島市中区堺町1-1-5